

さまざまなかい

— 対談・鼎談・会見記 —

福田陸太郎

中教出版

まぎまな出会い

―対談・鼎談・会見記―

福田陸太郎

中教出版

VARIOUS
ENCOUNTERS:
DIALOGUES,
TRIALOGUES
AND
INTERVIEWS

さまざまな出会い 対談・鼎談・会見記 © 1987

昭和62年11月20日 初版発行

定価 1800円

著 者 福田陸太郎

発 行 者 木村茂夫

発 行 所 中教出版株式会社

〒 101 東京都千代田区西神田2-3-16

電話 (03)263-1351 振替口座 東京2-16483

印 刷 所 三松堂印刷株式会社

製 本 所 合名会社 水上製本所

ISBN4-483-00051-9 <乱丁・落丁本はお取りかえいたします>

さまざまな出会い
— 対談・鼎談・会見記 —

目次

I 対談——諸家に聞く

- 『西脇順三郎全詩集』をめくって——西脇順三郎氏 7
- 文学の峰々を踏破して——矢野峰人氏 30
- 学問と人生と美の探究者——寿岳文章氏 52
- 辞書編集で知られる英語学者——佐々木達氏 73
- 多くの記念碑的訳業をもつ——朱牟田夏雄氏 95
- サン=ジョン・ペルス語る——佐藤朔氏 116
- 国際ペン大会の今昔——高橋健二氏 123
- 同時通訳の英語——村松増美氏 133
- 外国体験のことなど——大庭みな子氏 148

II 鼎談——話題を追って

- 詩心の文学——永井龍男／石原八束両氏と 179
- 嗜好について——西脇順三郎／鍵谷幸信両氏と 217
- 国際ペン東京大会を前に
——森本哲郎／三好徹両氏と 243

III 会見記——米英の文人たち

- ホレス・グレゴリとマリア・ザツレンスカ
Horace Gregory & Marya Zaturenska 265
- アレン・テイトとイザベラ・ガードナー
Allen Tate & Isabella Gardner 271

ロバート・フロスト	Robert Frost	277
シオドア・レトキ	Theodore Roethke	284
E. E. カミングズ	Edward Estlin Cummings	291
ドナルド・ホール	Donald Hall	296
フィリップ・ブース	Philip Booth	303
ルイス・アンターマイヤー	Louis Untermeyer	309
ロバート・ロウエル	Robert Lowell	315
アダムズとボーガンとドイツ	Léonie Adams, Louise Bogan & Babette Deutsch	321
マリアン・ムーア	Marianne Moore	328
ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ	William Carlos Williams	335
カール・シャピロ	Karl Shapiro	342
オルダス・ハックスレー	Aldous Huxley	348
ゲアリー・スナイダー	Gary Snyder	352
ソール・ベロー	Saul Bellow	356
チャールズ・ファインバーグ	Charles Feinberg	360
W. P. フリーデリッチ	Werner Paul Friederich	364
あとがき		368
人名索引		370

VARIOUS ENCOUNTERS:
DIALOGUES,
TRIALOGUES AND INTERVIEWS
© RIKUTARO FUKUDA

Published by Chukyo Shuppan Co., Ltd.
2-3-16 Nishi-kanda
Chiyoda-ku, Tokyo
101, Japan



First Edition November, 1987

I

対談

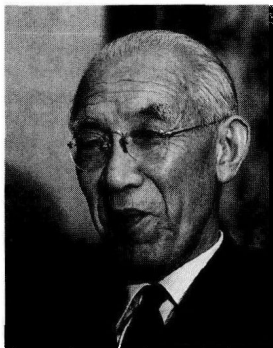
諸家に聞く

西脇順三郎

『西脇順三郎全詩集』をめぐって

業績の回顧

福田 今年になって西脇先生の全詩集が出版されて、先生の40年の間の詩作の全体が1冊に収められたことになって、私たちは非常に喜んでいるわけです。振り返ってみますと、先生が40歳のときですか『あむばるわりあ』が出、またその同じ年に『輪のある世界』というエッセイ集が出て、それから『ヨーロッパ文学』、『ヂオイス詩集』、それに評伝『ラングランド』というものも出ました。先生の40歳のときというのはアヌス・ミラビリス（驚異の年）みたいな年だと私は思っているのですが、それからまたさかのぼってみますと、先生が詩を書きはじめられたのが19歳頃ですかね。それからオックスフォードへいらっしゃって、日本語で本格的に詩をお書きになったのは30歳くらいですか。



西脇 いや、発表したときはどのくらいですか、35、6歳でしょう。日本語で活字にしたのが『三田文学』あたりじゃないですか、最初は。

福田 40歳のときにこういうたくさんの本を……。

西脇 それまでのやつだけ全部出したわけですから、40歳までの仕事なんですね。

福田 それ以後今日までの作品もときどきまとまった単行本になり、それらが今年出た全詩集にすべて収められるという具合で、先生は運がいい方でいらっしゃると思います。そこで今までのことを振り返ってみて、少しお話していただくとありがたいのですが、ぼくが興味をもっているのは、先生が中学のときから英語屋さんと言われたほど英語に興味をおもちになったということですが、ご郷里の小千谷というところには何か英語が好きになるような雰囲気があったのですかね。

西脇 それはないですけども、私の家というのが、私はだいたい早く親を亡くしたのですが、その親代りになった人なんかケンブリッジ大学に学んだ人で、英国との関係とかそういうものを子供の時分から知っているわけです。それから私の大叔父でも叔父でも慶応義塾に学んで、本でも英語の本があるわけですよ、田舎だけれども蔵へ入ると。だから英語をやることは何でもない。しかし田舎のことですから同時に漢文だとかもやりました。あまり国語の趣味はないようでしたけれども、英語とか外国文学と漢文学ですね。

福田 その頃から漢文の本をお読みになったのですか。

西脇 それは中学だけで、言語としては漢文は大嫌いだけれども、読んだ中にはなかなかいいものだなと、むしろ日本の文学に感心するより感心した。中学時代の漢文には、唐宋八家文なんか入っていますし、有名な詩なんかも読んでいます。論語も入っている。要するにシナの文学はいいものだなという印象が日本文学よりも

先に入っているわけです。

福田 どうも先生の青年時代のご様子などをみても、日本のことをあまり問題にしておられないようですね。

西脇 問題に全然しない。

福田 初めは絵がお好きでフランスへ行こうとなさったのですか。

西脇 すべて日本が大嫌い、しかしシナも大嫌いでした。というのは西洋と違うという意味でね。

福田 要するに画家になろうとなさったのだけれども、それがうまくいかなくて慶応にお入りになった。

西脇 いろんな事情でね、絵描きになれなかった。

福田 ほんとうは画家としての才能があったから、そのままうまくいけば画の方へお進みになったかもしれませんのね。

西脇 そう。だから絵に対しては今でも趣味があるし、自分でもいたずらいたします。

福田 21歳頃からフランスの詩人のものをお読みになっていたようですね。

西脇 ぼくは絵描きが好きですから、フランス語は中学時代から独学で少しやり出して。

福田 それに、今度は慶応の卒論なんかラテン語でお書きになったとか。

西脇 それは絵が好きで絵描きになろうとしたのを、いろいろなことで……、やはり外国の大学へ入りたかったのですよ。そうするにはやはりラテン語が必要だ。本式に入るにはラテン語の試験がある。ことにオックスフォードとかにはね。ケンブリッジ大学なんかラテン語の代りに漢文をやってくれるというところもあったけれども、オックスフォードではやらない。

福田 ラテン語を習ったり古代英語を勉強したりなさったことが、あとで詩の方にお進みになるのにも都合がよかったように思えますが。

西脇 都合がよかったし、早く英語が読めたことは、やはり英文学をやるときでも好都合だったし、発音学なんかや、ドイツ語をやっても、非常に役に立ったようですね。

福田 英語のジーニアスみたいなものを最初から会得されたわけですね。

西脇 ジーニアスというか、英語はどうして勉強すべきであるかわかった。英語の用途というのは、実際に英語で小説を書いたりして、つまりヨーロッパの文人になりたかったのです。日本語では世界的なものになれないと初めから思っておった。

福田 ちょうどイギリスへいらっしゃったのが19歳のときですね。ジョイスとかエリオットの作品が出た頃だと思いますが。

西脇 ちょうど出たわけですね。

福田 非常にはつらつとした時代ですね。

西脇 ちょうどうまく。それで今までぼくはギリシア主義であったので、つまりヨーロッパの古典ヨーロッパ主義であったのが、古典趣味がなくなって、急に現代趣味になったわけですね。

福田 それで31歳のとき『チャップブック』というのに先生の詩が載り、エリオットの詩も同じ本に出た。

西脇 同じですね。

福田 とにかくエリオットと同時代でいられたわけですが、その頃からエリオットに対してライバル意識といったものをおもちでしたか。

西脇 あったですね。ライバル意識と言っては向こうは嫌がるだ

ろうけれども、何だ田舎者がと。しかしその当時のアメリカだって田舎ですよ。日本でぼくはつまり『シンボリスト・ムーヴメント』を書いたシモンズを読み、エリオットはアメリカでシモンズを読んだ。日本の青年が読む本というのはアメリカで読む本とだいたい同じだったのです。だから教養というやつはだいたい同じわけですね。教養といっても、べつに学問が深いという意味でない教養ですね。ぼくはヨーロッパの文学をやろうとしたから、子供の時分から。だからボードレールの名前も知っている。ペイターを読み出す。ペイターというのはジェイムズ・ジョイスに最初に影響を及ぼした。ペイターがあるためにそれからシモンズが出てきた。よく今のイギリス、アメリカの現代文学の研究者がペイターをわりあいに考えないのはおかしいと思うのです。皆シモンズのお陰だと、エリオットは言うのですね。彼はそれでフランス文学に興味をもった。だけれども、それはシモンズ以前にペイターというものがいるからですよ。ペイターの考えをもっていると大陸的なシンボリズムへでも何でもすぐ入ることができる。

福田 とにかく、先生はエリオットと同じような文学的環境におられたことになりますね。

西脇 ええ、エリオットとね。話は戻りますが、シモンズとペイターというのは、シモンズのほうが弟子であると言われているくらいですから、ペイター、シモンズという運動があったわけですね。それはギリシア趣味であり、そして新しい大陸的な文学です。

福田 先生はあとからエリオット研究の本もお出しになっていますけれども、詩の方でもエリオットの詩のパロディみたいなものがありますね。「四月の初めは残忍ではない」とか。

西脇 ええ。それはわざとそう言ったのです。そういうのは何も

私はいい詩を書こうと思って書いているわけではない。ただいろんな人に連想をもって書く。それはエリオットも含めて、全部ヨーロッパの詩というものを頭において、だれその言ったことに関連して書くのですから、そうするとつまり詩というものは一つの教養としての詩の学問がまずなければいけないということになりますね。それをエリオットは伝統と言うようだけれども、学問なんて言うのが嫌がるものですから、教養とか、伝統とかいう隠れみのなんだ。

福田 先生はオックスフォードからお帰りになって、慶応大学の教授におなりになるわけですね。慶応では先生のお帰りを期待して待っていたみたいです。

西脇 そうでもないのですが、慶応の英語の先生になぜなったかと言うと、その当時慶応義塾卒業生で英語の先生なんかほとんど、ぼくが初めてでもないけれども、あまり採用しなかったものですよ。だけれどもぼくだけはだれかが非常に重要な英語の先生にしようとした。ただし、英文学の重要な先生にしようとしたかどうかはわからない。

福田 それからご活躍が非常にはなばなしくて、『三田文学』に寄稿されたり、佐藤朔さん編集の『馥郁タル火夫ヨ』に序文と作品を書かれ、『詩と詩論』に新しい詩論をのせられたり、『超現実主義詩論』が出たり、そして、さっき申し上げた40歳のときの「驚異の年」がやってきて、それから不思議なことに42歳頃から10年ほど詩をお書きにならなかった。

西脇 ああそうですね。

福田 ということになっているのです、どういうわけか。

西脇 それは鎖国時代でしょう。

福田 ヴァレリーが詩作を中断したというのなと違うのですか。

西脇 そんなことじゃありませんけれども、学者になろうとしたのじゃないですか。詩作をやるというより学問を、古い文学を研究しようとしたのじゃないですか。

福田 そして10年くらいたったときに、終戦後、こんどは『旅人かへらず』が世に出た。

西脇 その前の期間は、戦争で、要するに日本が鎖国したのですよ。戦争時代ですよ。戦争時代とその前後。戦争の前後を含めれば10何年というものは書かなかった。

福田 その間に日本の古典文学を読んだり、俳句の会にお出になったりしたとか。

西脇 終戦前ですね。

福田 さて『旅人かへらず』の話ですけれども、これは全部の構想をおたてになって書きためておられたわけですか。非常に大きなものがぱっと出た感じですが。

西脇 鎖国時代に日本の植物とか日本の自然が非常に好きになって、西洋的なものを全部除外したわけですが、その時代は。それは鎖国の結果ですね。西洋のことは関係が閉ざされちゃったのですよ。ヨーロッパでどういうものが盛んとかということはわからなかったのです。

福田 少しずつ書いておられたのを一度にお出しになったのですか。

西脇 ええそうです。それでそういう日本的なものを書こうとした。アメリカに占領されて、もうどうなるかわからぬ。こういう日本の面白いものがあるのに、この自然やこういう日本人の何か

特別な感情、土俗感情というものがなくなるおそれがあるから、書いておこう、ほんとうにそう思って書いたので、それが詩という形で出たのですけれども、ほんとうは詩でないかもしれない。ほんとうにいい詩を書いたつもりで書いているのでなくて、実際実感したところを、こういうふうに自分は感じる、これほどいいんだという、日本の風土や日本の人間の生活とかそういうもの、自然の生活というかな、そういう全体を愛して書いたのです。

福田 あの詩集で目立つのは、「……の淋しき」という言葉が多いことですね。

西脇 どうもあのときはまだ私は日本語に自信がなかったから、日本の詩は多少とも文語体を用いなければいけないという先入主があったのですよ。

福田 しかしあの本が出た頃、ぼくは先生に質問した覚えがあるのです。なぜ「淋しき」というのが多いのですかと聞きましたら、先生のご説明は、そう書かないと読者にわからないから、ということでした。

西脇 ええそうです。いやぼくの「淋しき」という言葉はね、清少納言なんです。「淋しさ」というと名詞になるけれども、「淋しき」というと形容詞になる。口語なら「淋しい」という言葉を「淋しき」と言ったわけですね。

福田 あの頃は『あむばるわりあ』の改訂版も出たわけですね。

西脇 ええ、『あむばるわりあ』の改訂版。言葉が気に入らなくて。比較的最近は自分で確信をもって日本語を書くようにするのですけれども、それまでは上田敏流のスタイルから脱却するのにずいぶん長い時間がかかった。そして萩原朔太郎のスタイルからも離れていきました。萩原朔太郎にもまだ文語口調が残っている